

MMCニュース 経営情報

2025年1月

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-20

ワカヤギビル 504

TEL.03-3511-6038 FAX.03-3511-6039

<https://www.mmc-office.co.jp>

有限会社MMC



新年あけましておめでとうございます。
本年も御愛顧のほどよろしくお願い致します。

継続的賃上げ実現のために 社員の生産性向上をどう実現 するかが経営者に問われる

2024年のビジネス界では大企業を中心に“賃上げ”が大きな話題になりました。経団連の十倉会長は2025年春闘において以下のように述べています。

賃上げ率が議論されがちだが、2%程度のインフレに対し、生産性向上を含めた賃上げを行うという考え方が根付くことがより大事だ。

また、中小企業の賃上げについては、あらゆる道具

を動員し、中小企業が賃上げできる環境を官民挙げて作っていくべきだと強調しています。

小紙においても何度か取り上げてきましたが、顧問先の皆様が労働力を確保するにおいて賃上げのプレッシャーがあるかと思います。また、経営者の皆さんにおいては企業の利益も確保しなければいけません。賃上げと企業利益の両方を実現するために、企業規模の大小を問わず、生産性向上が大切であることは言うまでもありません。

従業員お一人お一人の生産性が向上したとしても見落としていけないのは、従業員数の確保です。

1人1人の生産性が向上しても、企業全体の固定費を上回る従業員数がなければ、企業の利益は出ません。好況を大企業のものだけでなく、我々中小企業のものにしていくべく、工夫してまいりましょう！

スーパー撤退の地でも コンビニ出店 想定を上回る収益結果

ローソンは2030年をめどに、年間新規出店数の約2割を山間部などの過疎地とする方針です。国内のコンビニ店舗数が飽和状態となる中、人口減でスーパーが撤退する過疎地に出店余地があると睨みます。

ローソンの新規出店数は現在、年300店程度です。コンビニはこれまで、都市部や幹線道路沿いといった多くの集客が見込める立地が出店場所の基本としてきました。ただ、国内のコンビニ店舗数が5万5000店を超え、出店に適した立地は限られています。ローソンは都市部への出店と並行して今後、過疎地で撤退したスーパーの跡地などへの出店を強化するとの事です。

24年には和歌山県田辺市の山間部にあるスーパー跡地に出店しました。周辺は最寄りのスーパーまで車で30分以上かかる地域で、日常の買い物に利用してもらえるよう冷凍食品や野菜の品ぞろえを充実させました。店舗内に広めのイートインコーナーも設けるなど、地域住民の交流の場としての利用も狙っています。採算面についても「想定を上回る収益結果が出ており、

過疎地への出店という戦略に光明が見えている」と幹部社員はいいます。

人口が減少している地域での出店加速に向けて、今後は働き手の確保が課題となります。ローソンはAI(人工知能)やデジタル技術の活用を通じ、コスト削減を図っていくことで、出店可能な地域を増やしていきたい考えです。

都立高校に民間人校長 その苦労と功績 ビジネスにも参考になる！？

全国初の民間人校長として東京都立高島高校(板橋区)の校長を務め、昨年11月に79歳で亡くなった内田睦夫さんは、民間の感覚を取り入れた学校経営など都の教育界に確かな足跡を残しました。関係者からは功績をたたえる声が絶えません。

日立茨木テクニカルサービスの取締役だった内田さんが、教育の世界に転じたのは、1997年に発覚したある事件がきっかけです。当時、都教育委員会は生徒の理解度に応じてクラスを分けて授業するため、都立高に配置する教員を増やしました。しかし、こうした授業を行わなかった都立高が相次いで発覚するなどし、200人近い処分者が出ました。

閉鎖的な学校の体質や、場当たりの学校経営が問題視され、都教委は民間人の登用に舵を切ります。適任者を探してたどり着いたのが内田さんでした。

2001年、内田さんは55歳で高島高校に赴任しました。だが、現場は「改革者」への警戒感をあらわにします。体育教師だったTさんは「内田さんが高島に来ると決まった時は『日立でたくさんの従業員のクビを切った人』とか、変なうわさが広がっていた」と苦笑いする。内田さんは後の取材に「あいさつをしても無視され、職員会議では誰も発言しない。校長が不登校になりそうだった」と、着任当初の苦労を振り返っています

職員室に自分の机

校長室にはこもらず、自分の机を職員室に置きました。教員一人一人に声をかけ、理想の学校経営と一緒に

模索していきました。吹奏楽部の顧問だったKさんは「吹奏楽部の楽器不足を聞きつけて、すぐ解決に動いてくれた。ハートをわしづかみにされた」と懐かしむ。

「校長にできることは、現場の先生の熱意や工夫、技術をいかに引き出すか。それが回り回って生徒のためになる」。内田さんの方針は明確でした。

そのために、民間で培った知見をフル活用しました。日立から使われなくなったパソコンを譲り受け、当時は珍しかった教員に1人1台ずつを実現させました。さらに、オンライン上の共有ページを作り、教員が互いの授業の進め方を把握し、自身の授業に役立てることができるようになりました。

今では全ての学校が毎年度作るようになった「学校経営計画」も同様です。それまでの都立高校では、具体的な目標も計画も作られず、年度終了後の総括もありませんでした。内田さんは、各学校が計画を作り、その達成度合いを評価する仕組み作りを都教委とともに手がけたのです。

卒業証書を手書き

生徒にも温かく接しました。卒業証書を一人一人手書きし、教室へのエアコン導入に尽力。様々なことを学ばせたいと、近隣の大学と連携して大学の講義を受けられるようにもしました。

都教育監を務めたMさんは「民間人校長第1号として苦労も多かったと思うが、大きな役割を果たしてくれた」と感謝します。

5年の任期を終えた時、高島高校では教員や保護者による盛大な送別会が行われた。その後も、各地で講演を重ね、教育者として発信を続けた内田さん。「新しい世界に飛び込んで、先生や生徒と心を通わせた。とても楽しかった」。今年1月の取材に、自身の挑戦をこう振り返っていました。



MMCホームページ



YouTube



10年口やせました

<https://www.mmc-office.co.jp> 検索「MMC神保町」